2024年7月　下野新聞

居酒屋舞台 40年の流れ描く

岩瀬顕子（宇都宮出身）主宰の劇団

「涼月の記」14、15日 宇都宮公演

宇都宮市出身で、とちぎ未来大使を務める俳優・脚本家岩瀬顕子が主宰する劇団「日穏―ｂｉｏｎ―」の第17回公演「涼月の記」宇都宮公演が14、15の両日、県総合文化センターサブホールで開かれる。仕事と家庭の両立や、夫婦別姓など女性が抱える悩みや葛藤を盛り込みながら、ひたむきに生きる人々を描く。

日穏は岩瀬が企画・脚本を手がけるプロデュース劇団として、２００８年に旗揚げした。都内を拠点に公演を重ね、17年には「夕顔」で初の宇都宮公演。以降、コロナ禍を挟んで今回が５回目を迎える。岩瀬は「最初の公演がすごく楽しくて、ずっと続けたいと思った」と話し、回を重ねることに手応えを感じている。

涼月の記は「栃木県のとある町」をイメージした郊外の居酒屋が舞台。閉店を機に、１９８０年代後半から現在まで、約40年間の流れを、常連客と彼らを取り巻く社会背景と共に振り返る。時代ごとに幕が進み、自身、高校時代も演じる「コスプレ的な楽しみもある」というヒューマンドラマ。

岩瀬のほか、剣持直明、なかじま愛子ら出演者５人中３人が宇都宮市出身。社会的なテーマを据えつつ、栃木弁が飛び交い、笑いの要素も交える。

「観客と一緒に歳を重ねていくような舞台にしたい」という今作。コロナ禍で近しい友人を亡くした体験から、「今しかない人生を後悔しないように生きたいと強く感じるようになった。普段は忘れていても、何かの度にそんな気持ちを思い出したい」と脚本に込めたメッセージを語った。

14日午後７時、15日正午と午後４時の３公演。チケットは全席自由、前売り一般４千円、高校生以下２５００円（当日５００円増）。チケットは同センタープレイガイド㈹０２８・６４３・１０１３。（宇賀神いづみ）

「涼月の記」の稽古風景

はっぴん！まちなか記者

高藤美和子

「スポーツ盛んになった」

元宮っ子俳優 栃木愛語る

おはようございます、ミワリーです。街なか出身の俳優、岩瀬顕子さんが主宰する劇団「日穏―ｂｉｏｎ―」の宇都宮公演が８月に行われます。この舞台には「駅東」で小中学校を過ごした俳優、なかじま愛子さんも出演します。お二人に、駅東の思い出や宇都宮への思いなどを聞きました。

なかじま愛子さん

なかじま・あいこ　陽東小の３年生から、陽東中の計７年間を宇都宮で過ごす。青山学院大卒。劇団「張ち切れパンダ」所属。

「宇都宮は居心地がいいです」と宇都宮愛、栃木愛全開の２人

いわせ・あきこ　宇都宮大付属小、中、宇都宮女子高、米バージニア州立ウィリアム・アンド・メアリー大卒。劇団「日穏―ｂｉｏｎ―」主宰。とちぎ未来大使。

岩瀬　顕子さん

「おしゃれなもの増えた」

― 劇団「日穏」来月、宇都宮で公演 ―

―なかじまさんの宇都宮の思い出の場所は、どこになりますか。

なかじま　陽東小、陽東中だったので、宇都宮大工学部のところにある桜並木です。通学路にあって本当にきれいでした。お花見もしました。中学卒業後、親の仕事の都合で引っ越したのですが、ある時、宇都宮に行くとペルモールができていてびっくり。桜並木が心配でしたが、残っていてうれしかったです。

―岩瀬さんは駅の西側の街なか育ちですが、駅東はどうですか。

岩瀬　子どもの頃、宇都宮大の大学祭に、それから高校生の頃に自転車でボウリングに行きました。それと、田原屋かな。駅東は変わりましたね。

―商業施設の田原屋ですか…。懐かしい。確か、ラーメンを食べに行きました。

なかじま　駅東がだいぶ変わったので、この間、陽東小や陽東中にも行ってみたんです。陽東中の周りは昔、原っぱのような感じでしたが、住宅地になっていました。そういえば、駅の方に行くことを、「街に行こう」って言ってました。

―次世代型路面電車（ＬＲＴ）には乗りましたか。

なかじま　まだです。試運転は見ました。早く乗ってみたいです。

岩瀬　実は私も乗ってなくて。８月の公演のとき、みんなで乗ります！　でもＬＲＴでどこに行ったらいいでしょうか…。

なかじま　ペルモールに行きましょう。アルパカがいますよ（笑）。

―まさかの“アルパカ推し”ですね。ところで、宇都宮は駅の東も西も姿を変えつつありますが、宇都宮への期待は。

なかじま　栃木は文化度が低いと聞いたことがあります。でも例えば、私が着ているＴシャツは栃木県章のデザインでおしゃれ。種類もいろいろありました。おしゃれなものが増えてきているので、頑張ってほしい。

岩瀬　スポーツは盛んになったと思いますが、舞台を見る文化を盛り上げたいですね。残念ながら宇都宮演劇鑑賞会が2018年に休会しています。一般社団法人とちぎ映画演劇文化協議会を立ち上げたので取り組んでいきたいです。

―街なかについてはどう思いますか。

岩瀬　先日の昼間、お茶をしようと思ってオリオン通りに行ったのですが、くつろぎたいと思える場所がなく残念でした。飲み屋さんだけでなくいろいろなお店があって、お茶しに行けるような街なかになってほしいですね。

「涼月の記」14、15日開演

待ち合わせたのは東京・世田谷区のとある駅。大勢の人が行き交う中、なかじまさんは栃木県章が描かれたＴシャツを着て現れた。“栃木愛”全開だ。岩瀬さんも「これ、欲しい」とくぎ付け。取材はテンポの良い会話に笑いも絶えず、あっという間に時間が過ぎた。

２人が出演する舞台「涼月の記」の宇都宮公演は８月14日午後７時、15日正午と午後４時、県総合文化センターサブホールで開かれる。岩瀬さんは脚本も手がける。時代の流れや女性の社会進出を背景に、幕ごとに時代が進んでいく物語だという。ちなみに昨年、みやもっと面に登場してくれた街なか出身の俳優、剣持直明さんも出演する。楽しみだ。

来月 宇都宮で劇団公演「オミソ」

おはようございます、ミワリーです。街なか出身の俳優、脚本家の岩瀬顕子さんが主宰する劇団の公演「オミソ」が9月、県総合文化センターサブホールで行われます。同じく街なか出身の俳優、剣持直明さんも出演するとのこと。東京の稽古にお邪魔して、2人に街なかの思い出や、間もなく運行する次世代型路面電車（LRT）への期待などを聞きました。

公演の打ち上げで訪れた「宇都宮屋台横丁」

意欲満々 里帰りの2人

はっしん！まちなか記者 斎藤美和子

ミワリー（ミ）　昨年は岩瀬さんに、おしどり塚公園や県図書館など街なかの思い出の場所を伺いました。剣持さんにとってはどこになりますか。

■御本丸スケート場

剣持　御本丸スケート場ですね。小学生の頃、冬場は結構、行きました。出たところに屋台があって広島お好み焼きみたいなものを売っていて。それがおいしくておいしくて。

岩瀬　懐かしい。私も行きました。ココアを飲むのが楽しみでした。

剣持　僕は錦小だったので懐かしいと言えば、旧錦小ですね。今は錦中央公園になっています。当時は木造校舎で雨漏りがひどくて。近くの駄菓子屋に毎日のように行って「もんじ」を食べてました。

ミ　残念ながら、今はスケート場も駄菓子屋もありません。

剣持　あとは宇都宮二荒山神社ですね。おやじに「お前の名前は二荒山でもらってきた」と言われ、すごく印象に残ってます。それから本殿の東にある須賀神社のこま犬が大好き。すごくいい表情をしてる。

ミ　最近、気になる店などはありますか。

岩瀬　オーガニックや地元の野菜などにこだわる店があっていいなと思います。「下野農園」（下戸祭2丁目）には劇団のお弁当を頼んだこともあります。

岩瀬　顕子さん　宇都宮大付属小、中、宇都宮女子高、米ウィリアム・アンド・メアリー大卒。劇団「日穏―bion―」主宰。とちぎ未来大使。

剣持　直明さん　錦小、陽北中、宇都宮東高、東北福祉大卒。劇団「だるま座」座長。

懐かしい記憶 今も鮮明

剣持　「宇都宮屋台横丁」（二荒町）は良かった。雰囲気、いいね。

岩瀬　新型コロナ禍前、公演の打ち上げで行きましたね。JR宇都宮駅東のウツノミヤテラスの飲食店も結構、使っています。

■渋滞の解消に期待

ミ　その駅東では26日にLRTが運行します。

剣持　僕が高校生の頃、駅東は何もなかった。空き地が多くて。LRTはラッシュの影響を受けにくいという点ではすごくいいと思います。お年寄りの免許返納の問題もありますし。

剣持さんのお気に入りのこま犬。宇都宮二荒山神社の末社、須賀神社にある

栃木弁の舞台 楽しんで

岩瀬　バスよりもルートや乗り場が分かりやすいですよね。富山や熊本で路面電車に乗りましたが、絶対、ここに行くという安心感があって初めてでも乗りやすかった。駅東の渋滞も解消されるといいですね。

◇　◇

ミワリーは、岩瀬さんとはおさななじみ。剣持さんは同じ中学校区の〝お兄さん〟。こんな間柄で盛り上がった。最後に2人に公演への思いを聞いた。「年を重ねるほど、また実家がなくなり余計に故郷が恋しくなってきた。里帰り公演だという気持ちが強い」と剣持さん。岩瀬さんは4回目の地元公演の実現に感謝しつつ「もっと地元の人に見てほしいと設定を福島から栃木に変え、栃木弁にしました。笑って泣いて温かい気持ちになっていただければ」。

「オミソ」は9月8日午後7時、9日正午と午後4時に開演。チケットは全席自由。一般4千円（当日4500円）、高校生以下2500円。問同劇団080・4659・2008。

2023年下野新聞

老舗みそ屋舞台の物語

9月、宇都宮で上演

宇都宮市出身の俳優、脚本家の岩瀬顕子が主宰する劇団「日穏―bion―」の第16回公演「オミソ」宇都宮公演が9月8、9の両日、県総合文化センターサブホールで開かれる。平成元年の老舗みそ屋を舞台に、心温まる家族の物語を上演する。岩瀬は「初めて舞台を見る人でも分かりやすく楽しめる作品。生のお芝居のエネルギーを感じてほしい」と来場を呼びかけている。

日本食になくてはならない「みそ」に焦点を当てようと、脚本を書いた。2019年に上演した作品の再演。前回は福島県が舞台だったが、今回は本県の郊外に設定した。出演俳優たちは栃木弁に挑む。

時代はバブル真っただ中の平成元年。これまで昭和時代を描くことが多く、平成初期をテーマにするのは初めてという。「日本全体が盛り上がっていた時期。40代以上の人は懐かしい雰囲気を味わってもらえる」と話す。

店主の急逝により存続が危ぶまれるみそ屋を舞台に、そこに関わる人たちの姿を描く本作。実家のみそ屋を飛び出した次男役に、内浦純一を迎え、長男の妻役を岩瀬が演じる。宇都宮市出身の剣持直明も出演する。

音楽は、NHK連続テレビ小説「あさが来た」や人気アニメ「僕のヒーローアカデミア」シリーズなどを手がける林ゆうきが担当する。

開演は8日午後7時、9日正午と午後4時。チケットは全席自由で、一般4千円（当日4500円）、高校生以下2500円。問同劇団080・4659・2008。

（大貫茉伊子）

岩瀬顕子（宇都宮出身）主宰の劇団

舞台「オミソ」のチラシを手にする岩瀬

2023年北日本新聞

13　2023年（令和5年）7月21日　金曜日

劇団「日穏」公演「オミソ」

9月 県民小劇場オルビス

「心に刺さる物語」

内浦純一　富山出身

「親も子どもも、お互いを大切にしたいと思える作品」と話す内浦純一＝北日本新聞社

劇団「日穏―bion―」（東京）の公演「オミソ」が9月15、16の両日、富山市の県民小劇場オルビスで開かれる。主演の内浦純一（同市出身）は「親の立場で見る人もいれば、子どもの立場で見る人もいて、お互いを大切にしたいと思える作品。心に刺さる物語だ」と話した。

「日穏」は2008年に旗揚げした劇団で、祖母が県出身の岩瀬顕子が企画や脚本を手がける。戦争や差別、安楽死などの社会問題を絡めつつ、心温まる作品を上演している。富山県内では内浦と共に15年からほぼ毎年公演を行っている。

「オミソ」はバブル景気に沸く1989年、店主の急逝により存続の危機に直面するみそ屋を舞台にした家族の物語。内浦はみそ屋の次男・浩次を演じる。

作品のテーマは内浦が提案したという。テレビ番組のロケなどで老舗を訪ねる機会が多い内浦は、跡継ぎがいないため閉めざるを得なくなった店をいくつも見てきたからだ。2019年に初演したところ、「今ある家族を大切にしようと思った」など反響の声が数多く寄せられたため再演が決まった。

内浦は「いつまでも当たり前に親がいると思い込んで、ぞんざいに扱ってしまったり、素直に思いを伝えられなかったりする。大切な人がいる時間の尊さに気付かせてくれる作品です」と語った。

◇

公演は9月15日午後7時から、16日正午、午後3時半の計3回。前売り券は一般4千円（当日500円高）、高校生以下2500円。日穏の公式ホームページから申し込める。問い合わせは劇団、電話080（4659）2008。北日本新聞社後援。

2022年毎日新聞(東京版)

生死 選択する姿描く

「命の問題考えてもらえれば」

14日まで渋谷で上演

「死の自己決定」をテーマにした劇団「日穏―bion(ビオン)―」の新作「月虹の宿」が渋谷区東3の「シアター・アルファ東京」で上演されている。難病を患った女性が、自身の生死を選択する姿を描いた物語だ。

舞台は温泉街にある老舗旅館。亡き両親の跡を継いだ長男は苦しい経営状況に頭を抱え、長女も実家を手伝っていた。そこに、米国で生活し、難病と診断された次女が、安楽死が容認されているスイスに行く前に、別れを告げようと里帰りしたことからストーリーが展開する。

日穏を主宰する劇作家、俳優の岩瀬顕子さんは「以前から安楽死の問題に関心があった。安楽死を望む当事者、家族の葛藤を通して命の問題を考えてもらえれば」と話す。

岩瀬さん自らが次女を演じ、長女は俳優の柴田理恵さんがふんする。

14日まで。一般当日5000円。詳細は同劇団(080・4659・2008)。

【明珍美紀】

「月虹の宿」の1場面。次女役は岩瀬顕子さん(左)。難病の妹の行く末を案じる長女は柴田理恵さん―渋谷区で、加藤純子さん撮影

2022年下野新聞

「命」テーマに舞台

8月19、20日、県総合文化センター

宇都宮出身の岩瀬顕子 脚本・出演

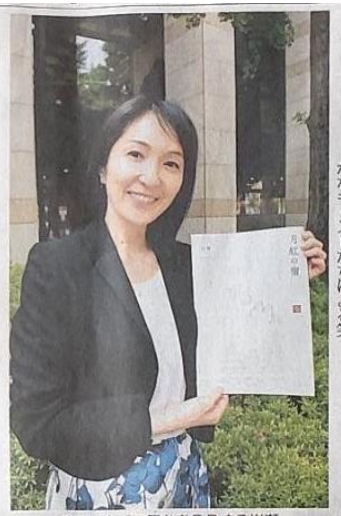
人情ドラマ「月虹の宿」

俳優や脚本家として活躍する宇都宮市出身の岩瀬顕子(旧名・岩瀬昌子)。主宰する劇団「日穏―bion―」による第15回公演「月虹の宿」を8月19、20の両日、県総合文化センターサブホールで開く。新型コロナウイルス感染拡大の影響で昨年中止となった公演のリベンジ。岩瀬は「ようやく再開できてうれしい。生の舞台でしか得られない感情を、皆さんと共有したい」と来場を呼びかけている。(多里まりな)

「わたし、自分の最期を自分で決めちゃいけないの?」。舞台は古びた温泉街に建つ老舗旅館。海外で長年生活していた次女の帰国をきっかけとして、死と向き合う家族の姿を描いた。

「命」をテーマに、個性豊かなキャストたちによる笑って泣ける人情ドラマを提供する。

助産師の長女加代子役には、ドラマやバラエティー番組で活躍する柴田理恵を



チラシを手に舞台をPRする岩瀬

泣き笑い「共有したい」

ゲストとして迎える。難病を患った次女真希を岩瀬が演じるほか、宇都宮市出身の剣持直明、中島愛子も出演する。

安楽死の在り方が問われた2020年の事件を機に、周囲と議論を重ねた岩瀬。「考え方は人それぞれ違う」と改めて気付かされた。日本では死について語ることはタブー視される傾向にあり、難しい題材と認識する一方で、学生時代から「死は必ず、誰にでも平等にやってくる」と捉えていたという。

「死を意識することは、生きる希望にもつながる。死について語り合ったり考えたりするきっかけとなり、命を大切に感じてもらいたい」

開演は19日が午後7時、20日は正午と午後3時半。一般4千円(当日4500円)、高校生以下2500円(前売り)。劇団扱いのみ。問同劇団080・4659・2008。

自殺と安楽死の違いは何なのか? 尊厳死とは? 残される家族の思いは?

公演前に映画上映会も

25、26日 宇都宮

昨年制作の「月の海」

岩瀬顕子主宰の劇団「日穏―bion―」第15回公演を前に、岩瀬が脚本・主演の中編映画「月の海」の上映会が25、26の両日、宇都宮市本丸町の「アトリエほんまる」で開かれる。

映画は、劇団が2016、18年に上演し好評を博した舞台「同名」から構想を得て昨年制作。設定や登場人物を変えており、新たな作品として楽しめる。

介護問題を背景に、血縁関係のない者同士が互いを思いやる姿を描く。岩瀬は「血のつながりに関係なく、人が人を思う気持ちの大切さを感じ取ってもらえたら」と思いを語る。

監督は秋生田宏治。家を出て行った夫の母を介護する静子を岩瀬、夫の母晴江を矢野陽子が演じる。宇都宮市出身の剣持直明、山本南伊も出演。舞台を中心に活躍する実力派がそろう。

上映会では、劇団がこれまでに上演した舞台作品の映像も併せて披露する。両日とも3部制。料金は一般1500円、高校生以下千円。詳細は劇団のホームページ(http://bion.jp)で。

上映会主催に伴い、岩瀬は一般社団法人とちぎ映画演劇文化協議会を立ち上げた。今後、県内のまちづくり団体や大学、企業などと映画撮影や舞台演劇のワークショップを企画する予定。(多里まりな)

介護通じ思いやり描く

企画展「おきなわ・しまの放送80年のものがたり 連続テレビ小説『ちむどんどん』の時代」―東京都港区のNHK放送博物館

沖縄放送史を振り返る

NHK博物館で企画展

2022年毎日新聞(栃木版)

宇都宮出身 岩瀬さん主宰の劇団

「死の自己決定」問う舞台

あすから 柴田理恵さんら出演

宇都宮市出身の劇作家、俳優の岩瀬顕子さんが主宰する劇団「日穏—bion(ビオン)—」の新作「月虹(にじ)の宿」が19、20の両日、宇都宮市本町1の県総合文化センター・サブホールで上演される。テーマは「死の自己決定」。難病を患った女性が、自身の生死を選択する姿を描いた物語だ。

舞台は温泉街にある老舗旅館。亡き両親の後を継いだ長男は苦しい経営状況に頭を抱え、長女も実家に帰って手伝っていた。そこに、米国で暮らしていた次女が里帰りしたことからストーリーが展開する。難病と診断された次女は安楽死が容認されているスイスに移住する前に、別れを告げにやって来たのだ。

岩瀬さんは高校卒業後、米国の大学に留学し、帰国後、演劇の道に入った。現在は東京を拠点に活動している。「以前から安楽死の問題に関心があった。当事者、家族の葛藤を通して命の問題を考えてもらえたら」と話す。舞台では岩瀬さん自らが次女を演じ、長女役は柴田理恵さん。また、旅館の料理人は同市出身で劇団だるま座代表の剣持直明さんがふんする。

時間など詳細は日穏(080・4659・2008)。【明珍美紀】

「月虹の宿」の1場面。次女は岩瀬顕子さん(右)、妹の身を案じる長女は柴田理恵さん(中央)、旅館の料理人は剣持直明さんが演じる=東京都内で、青木信之さん撮影

佐野市

7施設の愛称決定

陸上競技場などの命名権

佐野市が新たな財源対策としてネーミングライツ(命名権)パートナーを公募していた10カ所の運動施設のうち、7施設のパートナーと愛称が決まった。

市によると、決定したのは同市赤見町の運動公園にある市民体育館、陸上競技場、野球場、テニスコートと同市戸奈良町のアリーナたぬま、同市戸室町の田沼グリーンスポーツ銘柄にちなみ「清酒開華スタジアム」。アリーナたぬまは、地元の医療用具メーカー「大協精工」が「DAIKYOアリーナ佐野」、市運動公園市民体育館は、市内の調剤薬局「エファンドエフ」が「花・花薬局さの体育館」とそれぞれ愛称を付けた。条例上の正式名称

コットンウェイ知事に抱負語る

全日本クラブ野球

第46回全日本クラブ野球選手権大会(日本野球連盟、毎日新聞社主催)に関東地区代表として初出場するコットンウェイ硬式野球倶楽部のメンバーが17日、県庁の福田富一知事を表敬訪問し、大会への抱負を語った。

同チームは真岡市に拠点を置き、今年結成20年。7月にあった関東予選を勝ち抜き、念

2022年北日本新聞

東京の演劇ユニット「日穏—bion」は8月25~27日の3日間、県民小劇場オルビスで舞台公演「月虹(にじ)の宿」を上演する。祖母が富山市出身の劇団主宰岩瀬顕子(東京)と、富山市出身の俳優柴田理恵、内浦純一が出演。生と死の在り方を巡って葛藤する3きょうだいを熱演し、生きることの意義を観客に問い掛ける。(田辺泉季)

演劇ユニット「日穏」 来月富山公演

生きる意義を問う

日穏は2008年に旗揚げし、東京を拠点に活動する。岩瀬が企画や脚本を手掛け、俳優でもあるたんじだいこが演出。戦争や差別、介護などの社会問題を切り口に、思いやりや家族の愛情などの人間模様を丁寧に描いた作品を世に送り出してきた。富山では15年から公演し、今回が5回目となる。

「月虹の宿」は古びた温泉街に立つ老舗旅館が舞台。長女の加代子(柴田)と末っ子で長男の亮太(内浦)が暮らす旅館にある日、長年海外で生活していた次女の真希(岩瀬)が娘を連れて帰省する。楽しいだんらんとなるはずが、真希は難病に冒されており、安楽死するつもりだと打ち明ける。

タブー

「安楽死を題材に作品を書きたいという思いは以前からあった」という岩瀬。意識不明のまま亡くなった自身の父の死や、コロナ禍を苦にした身近な人の自殺、安楽死を肯定的に描いた海外の映像作品など、さまざまな死の形を目の当たりにしてきた。2年前、筋萎縮性側索硬化症(ALS)の女性患者の依頼を受け、薬を与えて殺害したとして医師2人が逮捕された事件もきっかけの一つだ。

殺人は絶対に許されないと強調した上で、岩瀬は「日本では、死を語ることがタブーとされる傾向がある」と語る。死と向き合う機会が少なければ「自分の死」を考えることもなく、安易に安楽死を否定してしまう人が少なくないという。「人は必ず死を迎える。『いかに生きるか』と同じくらい『いかに死ぬか』にも向き合いたいと思った」

同じ家庭で育ったきょうだいも前向きに生きている人もいれば、生きづらさから悲観的になってしまう人もいる。高齢化していく社会で、個人の選択としての死について、議論を避け続けるべきではないという。

リアル

生と死の在り方に正面から向き合う今作。日穏の舞台に初登場する柴田は、妹の死を止めようとする助産師の加代子を演じる。60代に入って自分や親、夫の死や病気について意識するようになり、もしもの時のことも家族で話すという。今回の役について「自分のことのように置き換えて演じている。物語の中の加代子のせりふは、私自身の気持ちとイコール」と話す。

加代子の言葉に間違いはないと思いながらも「現実の世界で加代子のような立場に置かれたら、自分が何を言うかは分からない。それがリアルだと思う」

2人の姉どちらの気持ちにも共感しつつ、姉が思う幸せに寄り添おうとする弟を演じるのが内浦だ。「選択や考え方は人それぞれで、きょうだいでも違う。揺れ動く亮太の気持ちが伝わるように演じられたらいい」と語る。愛情でつながり合うきょうだいの温かさや絆も表現したいという。

出演する3人に共通するのは、舞台を通して、自分や家族の死について改めて考えてみてほしいという思いだ。岩瀬は「死を意識することが、生を意識することにつながる。この作品が『いかに死ぬか』を考え、家族と話すきっかけになればいい」と話している。

◇

25日午後7時、26日同2時と7時、27日正午と午後3時半開演の計5回公演。前売り券は全席自由で一般4千円(当日500円高)、高校生以下2500円(前売りのみ)。日穏の公式ホームページから申し込める。

柴田 岩瀬 内浦

安楽死を巡って葛藤する3きょうだいを演じる(右から)内浦純一、柴田理恵、岩瀬顕子。左は演出を担ったたんじだいこ

2017年　下野新聞

気になるとちぎ

俳優・脚本家・アナウンサー
岩瀬　晶子さん

俳優、脚本家、アナウンサーで宇都宮市出身の岩瀬晶子さんは、本県を舞台にした演劇を県内や都内で公演するなど、精力的に活動している。本県ゆかりの都内在住者らでつくる「東京県人会」の理事も務める。劇団や県人会の今後の活動について聞いた。（記事は25面）

気になるとちぎ　話題の人に聞く　□28□

「芝居の力」を伝えたい

しもつけ随想

宇都宮出身の俳優、脚本家、アナウンサー

岩瀬　晶子さん

―本県かんぴょう農家をテーマにした演劇「夕顔」の企画、脚本、主演を務めました。きっかけは。

「演劇ユニット『日穏―bion―』を立ち上げて9年目となりますが、いつか故郷で公演をしたいと思っていました。私の学生時代は、栃木の名産品といえばイチゴというよりかんぴょうでした。県外ではかんぴょうがどんな風にできるのかを知らない人が多く、これをテーマにして演劇ができないかと考えました」

―かんぴょうからどんなイメージを膨らませたのですか。

「夕顔は夜に人知れず咲き、散っていく。とても切ないと感じました。けれども大きな実を付ける。そこからイメージを広げ、演劇では命の尊さ、日々を大切に生きていくことなどを伝えられたらと思いました」

―公演を終えていかがですか。

「とても好評でうれしいです。今回、『栃木は演劇の不毛の地』という声をよく聞きました。でも、きっかけがないだけなのだと思います。公演には児童養護施設の子供たちも招待しました。小さなうちに見てほしかったからです。芝居には人生を変えるほどの力があります」

―演劇を始めたのはなぜですか。

「アメリカの大学に通っている時、メキシコでストリートチルドレン支援のボランティアをしました。その時、流しの劇団がやって来たのですが、子どもたちがキラキラと笑っているのを見ました。芝居は、心に栄養を与えられるのだと感じ、それがきっかけです」

―今後の活動は。

「アメリカでは学問にもなっているドラマセラピーに取り組みたいです。芝居によって、押し殺されている感情やコンプレックス、トラウマを解放するというもので、私自身も体験しています。栃木でもワークショップなどができたらと考えています」

―都内在住者らによる「東京県人会」で、理事に就きました。県外から見て、本県の魅力PRに物足りなさは感じますか。

「栃木に帰って改めて感じたのは人が優しいこと。芝居の中で栃木弁で怒っても怖くならない、そんな温かさがあります。一方、とても謙虚な人が多く、魅力あふれる栃木をうまくPRできていないと思います」

―平均年齢60代後半という県人会の中で、若い理事になります。役割は。

「脚本家としての仕事になりますが以前、テレビ朝日のドラマ『警視庁捜査一課9係』で、栃木弁を取り入れたことがありました。さいなことですが、東京にいながらできるPRはたくさんあります。県人会の30、40代が中心となって盛り上げられるような仕掛けや、雰囲気づくりができたらと思っています」

（聞き手、写真　小野裕美子）

宇都宮市生まれ。宇都宮女子高卒。米ウィリアムアンドメアリー大学卒。藤本ケイの名でアナウンサーとしても活躍し、テレビ出演や国際会議の司会なども務める。神奈川県在住。

俳優、脚本家、アナウンサーとして活躍する岩瀬晶子さん＝東京都文京区のホテル

2018年　下野新聞

2018年（平成30年）9月30日（日曜日）　下

地元公演を「楽しみにしている」と語る岩瀬

岩瀬晶子（宇都宮出身）が脚本・出演

『家族への思い』介護通し

来月12、13日　地元で舞台「月の海」

脚本家や俳優、アナウンサーとして幅広く活躍する宇都宮市出身の岩瀬晶子が企画・脚本を手掛ける演劇ユニット「日穏―bion―」の第10回公演「月の海」が10月12、13の両日、県総合文化センターサブホールで行われる。

親の介護という身近な話題を切り口に、命や家族に対する思いを描く。岩瀬は「笑いあり、涙あり、そして最後は、きっと心が温かくなるはず」と来場を呼び掛けている。

岩瀬は宇都宮女子高卒。得意の英語を生かし、アナウンサーとしては「藤本ケイ」の名で、主にNHKのテレビ・ラジオ番組を担当。2017年には、とちぎ未来大使に就任した。

「月の海」は16年に初演。2年ぶりの再演となる今回は、新たなキャストで臨む。実家で認知症の母の介護に専念する望月静を岩瀬、行方不明の弟豊と泥棒の2役を内浦純一が扮する。静の幼なじみでもあるケアマネジャーを「日光ざる軍団」の演出も務める宮地大介が演じる。

「介護」という切実な問題に正面から向き合い、周囲の人々との絆を表現した舞台は初演時、大きな反響を呼んだ。介護経験者からは「ありがとう」「苦しみから救われた」といった感想が多数寄せられたという。

岩瀬自身、「月の海」の脚本制作直前に母親を亡くし、悲しみと自責の念に駆られたという。介護現場の取材を基に脚本を構成したが、そこには母親への感謝も込められている。

「母とはいろいろあってうまく話せない自分がいた。でも、亡くなった後、実家の本棚から私が載った雑誌が出てきて。うれしかった」

地元公演は昨年に続き2回目。岩瀬は「舞台は役者と客席が同じ空気、同じ感情を共有し合う感覚が癖になる。気軽に足を運んでほしい」と話す。

開演は12日午後7時、13日午後3時半。チケットは全席自由で一般3千円、高校生以下2500円。同センタープレイガイドなどで販売中。問劇団事務局080・4659・2008。

（小林睦美）

舞台「月の海」の一場面

2017年9月　朝日新聞

かんぴょう農家再生物語

宇女高OG俳優が企画、県内初上演へ

稽古中、全出演者が作業体験

栃木の特産「かんぴょう」をつくる農家を描いた舞台公演が今月、宇都宮女子高校OGの手で県内で初上演される。家族の再生をテーマに描いた作品で、8月には東京で公演された。出演者9人のうち4人が宇都宮市出身で、息のあった栃木弁でのやりとりも見どころの一つだ。

母校、宇都宮女子高校へ公演の報告に来た岩瀬晶子さん＝宇都宮市操町

タイトルは「夕顔」。企画と脚本を担当したのは、宇都宮女子高校を1991年に卒業した俳優の岩瀬晶子さん。岩瀬さんは2008年から演劇集団「日穏―bion―」を主宰、自らも舞台に立っている。NHKラジオの英会話講座では藤本ケイとしてナビゲーターをしている。

「夕顔」は栃木のかんぴょう農家の川上家で、両親の跡を継いだ長女を主役に、姉妹がぶつかりながらもある事件をきっかけに再生していく物語。岩瀬さんは昨年3月に実母が急死した。今年は同級生2人が続けて亡くなり、「自分もいつどうなるか分からない。この瞬間を後悔しないように生きなければ」と思ったことが、この物語を作ったきっかけだと話す。8月に行った東京・中野での公演は好評で、手応えをつかんだ。

題材を考えた時、頭に浮かんだのが自身が生まれ育った土地の名産「かんぴょう」だったという。夕方咲き始めて朝には散ってしまう夕顔のはかなさと、丸々とした大きな実「ふくべ」ができるおかしさのギャップにもひかれ、舞台のタイトルにもした。脚本を執筆する中で、上三川町のかんぴょう農家を取材し、稽古中には出演者全員で朝早くから農家に出向き、かんぴょうむきなどを体験した。

公演は岩瀬さんだけでなく、宇都宮市にゆかりのある役者が出演する。劇団だるま座主宰の剣持直明さん(53)は宇都宮東高、テレビや舞台で活躍中の山本南伊さん(36)は宇都宮北高、劇団張ち切れパンダ所属の中島愛子さん(36)は陽東小・陽東中出身。岩瀬さんは「笑えて泣けて、最後は少し心が温まる舞台です。地元での公演を楽しみにしています」と話す。

公演は27日午後7時と28日午後2時、県総合文化センターで。一般は3千円、高校生以下2500円。詳細は同センターのホームページ（http://www.sobun-tochigi.jp/2816.html）で確認できる。

（佐藤太郎）

2017年8月　下野新聞

岩瀬晶子（宇都宮出身）が企画・脚本

演劇「夕顔」かんぴょう農家舞台に

来月宇都宮で公演

俳優・脚本家・アナウンサーとして活躍する宇都宮市出身の岩瀬晶子が企画・脚本を手掛ける演劇ユニット「日陽―bion―」の第9回公演「夕顔」が9月27、28の両日、県総合文化センターサブホールで開催される。本県出身の俳優も3人出演。ふるさとでの初めての公演に岩瀬は「一度は地元で舞台をやりたいと思っていた。感情を持って演じるお芝居を生で鑑賞すると、びんびん伝わってくる。栃木の人たちにそういう感覚を味わってもらいたい」と来場を呼び掛けている。（内藤大地）

物語の舞台は、栃木県でかんぴょう農家を営む川上家。夏の収穫期には三女母子や隣人たちがやってきて長女夕子の作業を手伝うのが毎年の恒例となっている。そこに何年も音沙汰がなかった次女夏実が突然姿を現す。久しぶりの再会を喜ぶ母子たちとは裏腹に、夕子だけは夏実と目を合わせようとしない。それぞれが秘密を抱えながら集まったある夏の日の物語を描く。

長女役で出演する岩瀬は「せっかくやるんだったら栃木の話にしたいと思った。日々を大切に生きていきたいなと感じてもらえる舞台にしたい。皆さん素晴らしい役者さんなので、演劇を見たことない人にも楽しんでもらえる」と話す。

今回の舞台は、岩瀬のほかにも「劇団だるま座」の代表を務める剣持直明（宇都宮東高卒）、舞台やドラマで活躍する山本南伊（宇都宮北高卒）、「劇団張ち切れパンダ」に所属する中島愛子（宇都宮市陽東小・陽東中卒）と本県出身の俳優が出演。

ふるさとでの公演に向けて意気込む（左から）剣持、岩瀬、中島、山本

俳優陣　本県出身3人も稽古に熱

出演者は県内のかんぴょう農家を取材し、作業を体験して役作りの参考にしたという。本番に向けて稽古に熱がこもるが、稽古場では栃木トークで盛り上がっているという4人。剣持は「お芝居は面白いと思ってもらえるきっかけの一つになったらいい」、山本は「高校生や若い人にも演劇に触れてもらうチャンスになれば」、中島は「地元に残っている同級生が観に来てくれたらうれしい」とそれぞれ意気込みを語った。

27日は午後7時、28日は午後2時開演。チケットは一般3千円、高校生以下2500円（全席自由）。チケットの予約は080・4659・2008、メールはinfo@bion.jp

宇都宮公演に先立ち、東京公演が同月23～27日に中野区のテアトルBONBONでも行われる。

2016年8月　北日本新聞

9月30日、10月1日 富山で舞台「月の海」

内浦純一（富山出身）が主演

家族へ感謝の気持ちを

富山市出身の俳優、内浦純一（41）が主演を務める舞台「月の海」が、9月30日と10月1日の両日、県民小劇場オルビスで開かれ、介護を担う家族や命をテーマにした物語を繰り広げる。

「家族へ感謝の気持ちを持つ大切さを伝えたい」と語る内浦純一＝北日本新聞社

北日本新聞社を訪れた内浦は「人生はいつか終わりを迎える。生きている今、周りの人に感謝する大切さを伝えたい」と話している。

内浦は富山商業高、神戸学院大卒で、俳優の仲代達矢が主宰する「無名塾」で学んだ。今回の舞台は演劇ユニット「日穏―bion―」の第8回公演。毎回、女優やアナウンサーとして活動する岩瀬晶子が脚本を手掛けており、内浦は3回目の出演となる。

作品は、実家で認知症の母の介護に専念する女性、望月静や行方不明になった弟の豊、近所の住民、ホームヘルパーらの姿を描き、周りの人々の絆を表現する。内浦は豊と泥棒の二役、岩瀬は静を演じる。

公演が決まり、家族を初めて温泉に連れて行ったという内浦。「家族はずっと側にいてくれると思いがちだが、別れは訪れる。後悔しないよう、言葉や行動で思いを伝えてほしい」と語る。

◇

公演は9月30日午後7時、10月1日正午、午後3時半から。チケットは全席自由で一般3千円、高校生以下2500円。チケットの申し込みは「日穏」のホームページ（http://bion.jp）などで受け付けている。問い合わせは「日穏」、電話080（4659）2008。北日本新聞社後援。

bunka1@ma.kitanippon.co.jp

2015年8月　東京新聞

連合国軍総司令部（GHQ）を説得し、編集者として戦争の悲惨さを訴える「ビルマの竪琴」を世に出すなど、戦後の児童文学界に影響を与えた故藤田圭雄氏(1905～99年)。孫の岩瀬晶子さん(43)は「戦時中に反戦を訴えられなかった後悔が、戦後、祖父を突き動かしたのでは」と言う。そんな「反戦」を継ぐ思いを、岩瀬さんが戯曲「明日花」にしたためた。（池田俊一）

祖父の「反戦」引き継ぐ

「ビルマの竪琴」編集者の孫

文学者の「自責」戯曲に

「活字が人殺しの道具に」

戦意高揚の絵本を描いた児童文学作家が戦後、自責の念に駆られて苦悩する姿を描いた。

今月十八日夜、東京都内のビルの一室。岩瀬さんが主宰する劇団日穏の稽古は熱がこもっていた。

「俺が戦時中に書いたもん読んで、たくさんの少年たちが戦場に行って死んだんだ！」

「でも私たちみんなが、お国のために鬼畜米英をやっつけろと熱狂しとりました。流されてしもうた。だからこそ、あの戦争を体験したあなたに、もう一度書いてほしいがです」

舞台設定は終戦から五年後の東京近郊。フィリピン戦線から帰還した作家が、慣れない土地で元の職業を隠し偽名で暮らしていたところ、再会した元妻に再びペンを執るよう背中を押される場面だ。

元妻役は岩瀬さんが務める。「祖父が戦時中、戦意高揚につながる文学に携わったかは分からない。だが、反戦を訴えることはできなかったはず。そんな後悔が、戦後の行動につながったのでは」

脚本も書き、出演する岩瀬晶子さん。主人公の児童文学作家に、祖父の故藤田圭雄氏を重ねる
「明日花」の一場面＝東京都新宿区で

藤田氏は児童文学や童話の編集者、作家、研究者として長年活躍し、日本児童文学者協会名誉会長や日本童話協会名誉会長を歴任。戦時中は徴兵されることなく、出版社で児童文学を担当する編集者として、つづり方読本の発刊などに関わった。

そして終戦翌年、仲間と少年雑誌を立ち上げ、文学者の故竹山道雄氏に執筆を依頼。書き上がったのが、ビルマの竪琴だった。しかし当初はGHQの検閲で掲載が認められなかった。

藤田氏の長女で岩瀬さんの母敦子さん(八)は「GHQからは『戦争を美化している』という理由で止められたようだが、父は『遵うんだ。反戦を訴える作品なんだ』と言い続け、GHQに日参していた。掲載許可になった日のことを後年、『見上げた空に真っ白な雲が浮かんでいて、とてもきれいだった』と懐かしんでいた」と振り返る。

戦後七十年。岩瀬さんは「無口で穏やかだった祖父がGHQに掛け合ってまで訴えた反戦を、私も訴えたい」と思い、今回の戯曲のテーマに「ペンと戦争」を選んだ。

戦争経験者二十人以上を取材する中で、祖父のいた文学界、新聞界などが、軍部の思惑に沿う形で戦争に加担して被害者を増やすことになったと知った。

戯曲は、児童文学作家が戦後、花火店の主人とともに、花火大会を再開させる過程を描く。終盤、花火店主は作家にこうつぶやく。

「人を笑顔にしてえと思って、花火師になったんだ。だがな、戦時中は火薬は全て爆弾になっちまった。同じ火薬が人を笑顔にするものにも、殺す道具にもなる。活字も一緒なのかもな」

公演は東京・中野の劇場MOMOで二十六日～九月二日。問い合わせは日穏＝電070（6519）7904＝へ。

2015年8月　北日本新聞

富山市出身の俳優、内浦純一が18、19の両日、富山市の県民小劇場オルビスで行われる舞台公演「明日花」で主役を務める。終戦後、花火師になりたかった戦友の遺志を受け継ぎ、戦争で途絶えた花火大会を再開しようと奮闘する富山出身の男性を演じる。北日本新聞社を訪れた内浦は「戦後70年の節目に、平和の尊さを考えるきっかけになればうれしい」と語った。（文化部・黒田修一朗）

平和の尊さ考える契機に

戦後の花火大会が題材

内浦純一（富山市出身）主演舞台「明日花」　18、19日 オルビス

「平和を考えるきっかけになればうれしい」と語る内浦純一（左）と岩瀬晶子＝北日本新聞社

舞台は演劇ユニット「日穏―bion―」が企画した。毎回、脚本家で女優、フリーアナウンサーの岩瀬晶子が物語を書き下ろし、俳優の仲間たちに呼び掛けて都内で公演している。内浦は前作「Gift～星空の向こうから～」に続き、2回目の出演となる。

空襲体験を取材

今回の「明日花」は、終戦から5年たった関東のある町が舞台。フィリピンのルソン島から復員した主人公・良夫（内浦）は、戦争で十数年間開かれていない町の花火大会を復活させたいと考えていた。この町は、軍隊の部下でルソン島で戦死した清の生まれ故郷。生前、清は実父の跡を継ぎ「花火師になりたい」と良夫に言っていた。良夫は清の思いを胸に、花火大会の準備に奔走する。

東京公演に出演する内浦（左から2人目）。花火大会の開催に奔走する男性を演じる＝東京都中野区の「劇場MOMO」

内浦が戦争に関する空襲に出演するのは初めて。戦地で飢えに苦しむ良夫が、富山の豊かな食卓を思い出すシーンでは、演技にリアリティーを持たせるため、食事の量を減らして白米を口にしなかったという。「戦時中の環境とは全く違うけれども、当時の人たちの思いに少しでも近づきたかった」と振り返る。

演劇の後半、富山で夫の帰還を待っていた良夫の妻（岩瀬）がこの町にやってきて、富山大空襲について語る場面がある。演技の参考にするため、内浦と岩瀬は7月末から8月初めにかけて富山市内を訪れ、富山大空襲を経験した男性から話を聞いたり、図書館で空襲について書かれた本を読んだりした。8月1日には戦没者の鎮魂と復興、平和への願いを込めて毎年行われている「北日本新聞納涼花火富山大会」の会場も訪れた。

「花火も爆弾も同じ火薬が原料なのに人を笑顔にしたり、逆に人を苦しめたりする。美しいものを凶器にする戦争は、絶対に繰り返してはならない」と、内浦は力を込める。

同級生から支援

富山公演に先立ち、8月26日から9月2日まで、東京都中野区の劇場で11回上演した。90人収容の会場は全ての公演でほぼ満席となり、キャンセル待ちも出た。岩瀬は「演劇を見ていただいた方の口コミで、公演を重ねることに観客が増えた。見られなかった人の中には、北陸新幹線に乗って富山公演に行きたいという人もいた」と喜ぶ。

内浦はことしデビュー14年目を迎えた。映画やテレビドラマに多数出演してきたが、県内での舞台公演で主役を演じるのは初めてとなる。今回の公演では、小中学校、高校の同級生たちが舞台セットの組み立てや、チケットの販売などを手伝ってくれることになった。「富山の皆さんに支えられて活動していることにあらためて気付いた。感謝の気持ちを胸に、一生懸命に演じたい」と語った。

◇

公演は北日本新聞社後援。18日は午後7時、19日は正午と午後3時半に開演する。チケットは全席自由で一般3千円、高校生以下2500円。鑑賞希望者は事前に電話かメールで公演事務局に申し込む。電話は070（6519）7904、メールはinfo-toyama@bion.jp

2008年1月　東京新聞

戦場の記憶 元兵士の葛藤…

戦争体験者の「心」描く

若手役者が新作劇 杉並の劇団

〝知らない世代〟へ「届けたい」

戦争体験者の思いを継承していきたい―。そんな気持ちを抱いた若者十人が三十日から、戦争に翻弄（ほんろう）された人々の「その後」を描くオムニバス劇を東京都新宿区の劇場で上演する。戦争を知らない世代の出演者たち。「私たちが今できることは何か」と自問しながら、「けいこ」を重ね、戦争の影を引きずる人たちを演じ抜こうとしている。

四つのエピソードで構成するオムニバス劇「初恋」を上演するのは、杉並区阿佐谷を拠点に活動する演劇集団「心日庵（しんびあん）」。今回の劇は二十―三十代の若手役者だけで作り上げた。

企画、脚本を手掛けた団員のフリーアナウンサー岩瀬あき子さん（三六）は、日々のニュースを読む中で疑問を抱いた。「かつて日本が経験した戦火が世界中で毎日のように繰り返されているのに、国内のニュースで大きく扱われることは少ない」

そんな折、街頭で女子高生同士の会話を耳にした。「日本がアメリカと戦争をしたって、マジ？」

岩瀬さんは驚くとともに、自身が戦争についてどれだけ理解しているのかを確かめようと、昨夏、戦争体験者の声を録音して後世に残す集会をのぞいてみた。集会では、すっかり腰が曲がったお年寄りたちが、中国で人体実験に参加した苦悩、出撃を控え、死を待つだけの特攻隊員の恐怖、南方で仲間をも焼き殺さざるを得なかった悪夢を吐露していた。

「戦争を知る世代とまるで知らない世代のはざまの世代として、この恩いの橋渡し役をしたい」。岩瀬さんは、所属劇団の公演を通じて若い世代に「声」を届けられないか、と考え、企画の準備を進めてきた。

劇中、ガダルカナル島で戦った元兵士を描く場面がある。終戦から五年後、生き別れになっていた婚約者と再会を果たしながら、元兵士は冷たい言葉で彼女を突き放してしまう。本当は結ばれたいが、戦地で自分が手を染めた行為を許せないでいる内心の葛藤（かっとう）―。

元兵士役の俳優西村清孝さん（三〇）は「役づくりの過程で文献を読みあさり、知らない史実の多さに驚いた。芝居を見た人が戦争を考えるきっかけにしてくれるとうれしい」と願う。

公演は三十日から二月三日まで、新宿区中落合二の「シアター風姿花伝（ふうしかでん）」（西武池袋線椎名町駅など下車）で全七回行う。入場料は前売り二千八百円、当日三千円。

復員した元兵士が婚約者と再会するシーンをけいこするメンバー＝東京都杉並区で

2012年8月　毎日新聞

シアター

「かわたれの空」で戦争の痛み表現

女優で劇作家の岩瀬晶子＝写真＝が主宰する演劇ユニット「日穏（ひおん）」が29日～9月4日、舞台「かわたれの空」（岩瀬作、たんじだいご演出）を東京・中落合のシアター風姿花伝で公演する。戦後の復興期に力強く生きる人々とそれでも残る戦争の傷跡が交差する。

サンフランシスコ講和条約が発効し、日本が国際舞台に復帰した1952年。ある港町に事故で記憶を失った男が運び込まれる。男は9年前に町から出征した男で、妻は懸命に夫の記憶を呼び戻そうとするが、男には町に帰ってこられない理由があった。

妻役も演じる岩瀬は「戦争に翻弄（ほんろう）された家族を描こうと思った」。送られた戦場・フィリピン諸島での記憶が男の心を苦しめる。「戦場での自分の行為を責めて生きた人もたくさんいる。戦争では時に加害者にもなってしまうという痛みを表現できれば」

ただ、復興に生きる港町の人々の明るくて軽妙なやり取りも見どころ。「基本はエンターテインメント。構えずに見に来てほしい」。問い合わせは070・6519・7904へ。【木村光則】